失語症意思疎通支援者養成講座資料　　　　　　　　　　　　　　 2022年9月11日

失語症のある人の日常生活

前触れもなく冬の朝、突然に 　　　　　　　　　　　　 鳥羽田　浩史

脳梗塞に見舞われたのは2015年11月上旬のことでした。家で父のジョギングをして普通に過ごしていた私が、体の異変に気づいたのは11時頃だったと思います。

洗顔中に左手が右手に触れたのですが、右手の感覚がなくて、「あれっ？」と。当時、２階にいたのですが、１階に下り、瞬間、ガクンとその場に倒れました。

 起き上がろうとしても、まったく体に力が入らなくて。そこからの記憶は全然ないです。家族が洗面所に駆けつけて私の顔を見たときには、顔の右側が垂れ下がっていたそうです。

これは危ない状態だと察して、救急車を呼んでくれました。後で、聞いたのですが、救急車に乗せられていて、「この症状は脳だと思うので、自治医科病院へ急ぎます」と言う救急救命士さんの声を聞きながら。

倒れてから２日ほど経過した頃、ずーっと意識がクリアになると同時に体が動かない事にきずきました。病院に着いたときには自力で歩けるようになるんだろか？

ましては、喋れないと思いもしなかった。

入院中、どうしてこんなことになってしまったのだろうと幾度も考えました。血圧の数値が高いと指摘されていたれども。

ただ、今にして思えば、脳梗塞で倒れた頃の私は、仕事が大好きなはずなのに、自分がどこに向かって頑張っているのかわからなくなっていたのです。

「疲れてるのかな」と内心気づいていたのに、気合で乗り越えるのが美徳だと信じきっていたので、病院で検査をしてみようとか、ゆっくり休もうという発想にはなれなくて。

病院のベッドの上で「体の声を無視していたから、こういう方法で知らせてきたのか」と思ったりもしました。

退院が決まった時点でも、そこで「どうしたものでしょうか」と医師に尋ねたところ、「つきあっていくしかない」と。当然、不安がなくなるわけもなく、独自に治療法を探ることにしました。

退院後は、実家でしばらく療養生活を送っていたのですが、この期間は、どうしよかの、時期でした。当たり前のことですが、私がいなくても会社も社会も回っていく、ということを突きつけられる気がして。

落ち込んだりもしましたが、まずは安心して生きたくて、情報を集めたり、知り合いに聞いたり。

脳梗塞を患ったことはショックでしたが、それ以上に仕事や自分との向き合い方を見つめ直す転機となりました。

人間って、何でも自分で意思決定できると過信しがちですよね。私も以前は、がむしゃらに努力をすればある程度のことは叶うはず、なんて傲慢なことを思っていました。

でも人生はままならないもの。自然の流れに身を委ねて生きていくのは大事なことだと思えるようになり、ずいぶんと柔軟な考え方ができるようになったと思います。

脳梗塞の予防には水分補給が欠かせないということで、一日に2リットルの水を小分けにして飲むのが日課。

なかでも一番大切にしているのは、「いつもと違う」という感覚です。たとえばフルーツを食べて、普段より苦いと感じたら、疲れているのかもしれないと思って気をつけるといった具合に。

自分の体の違和感や異変を見逃さない、自分をしっかり把握できる生活を心がけています。

病気の方やご家族が笑顔になれたり、「優しい差別」という言葉を耳にします。気を使いすぎることが、かえって当事者の本音を封じてしまったり、心を通わせる妨げになってしまうのだと。

脳梗塞になって、思う事。できれば、＜脳梗塞になったなんて言いたくない。＞ですよね。できれば、＜ずっと黙ってたいよね。＞ひっこみがちに、なってしまう。

出不精になってしまう。恥は、かきたくないよね・・・

いよいよ、臆病になってしまう。

人の、気持ちは、とても脆いのです。ましては、障害をもつものに対しては脆いのです。

何も差別もないよね。といってもあるのです。

私も、療養生活を終えて仕事に戻ったときに、職場の人たちから「大丈夫？」と声をかけてもらい、とても感謝しつつも、病気の話ばかりでどこか寂しいなと感じることもあって。

できれば、「人の障害を持つ者にとって最善の苦労を共にして、知らず知らずのうちに引かれてしまう線のようなものを超えていきたい。人の障害を経験したからこそ、新たな伝え方ができる」と思っています。